

# 日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

キャンパス通信 第1号 2011年 前期  
April, 2011 – September, 2011

ひとりを見る目、その目を世界へ。

日本赤十字  
九州国際看護大学  
The Japanese Red Cross  
Kyushu International  
College of Nursing

## 被災地研修報告

3年 前期科目「国際保健・看護Ⅱ」の一環として  
東日本大震災の被災地にてボランティア活動を行いました。

平成13年度の開学時から、毎夏、学生を海外に派遣し研修を行っている授業科目「国際保健・看護Ⅱ」の一環として、今年度は、3月11日の東日本大震災の発生を受け、東北被災地に学生を派遣しました。

宮城県の南三陸町・亶理町など、特に被害の大きかった地域を中心に、約80名が看護補助などのボランティアとして活動しました。

学生は、8月2日（火）に被災地に入り、10名程度のグループに分かれ、約6日間に亘って、地域医療の手が行き届きにくい仮設住宅での健康相談や老人保健福祉施設での入浴・食事介助等に従事しました。

また、被災地のひとつ、石巻市での災害医療拠点病院となっている石巻赤十字病院を訪れ、看護部長ら関係者の話を聞き、看護職としての災害等緊急時対応の実際について学びました。

○派遣団 日本赤十字九州国際看護大学 学部生・院生/卒業生/教職員 81名

○派遣期間 平成23年8月2日(火)～8月8日(月) 6泊7日

○主な派遣地 宮城県 石巻市、南三陸町、亶理町  
石巻赤十字病院、医療法人医徳会 つつじ苑、  
社団医療法人啓愛会 介護老人保健施設ハイム・メアーズ、  
南三陸町社会福祉協議会 デイサービスセンター うたつ・  
はまゆりグループホーム、  
社会福祉法人 美楽会 特別養護老人ホーム いこいの海・あらと、  
特定非営利活動法人七福心グループホーム リアスの丘

○活動内容等 ・仮設住宅入居者の健康相談・こころのケア(巡回)  
・保健福祉施設での入所者・デイサービス利用者の介助(食事・排泄・入浴等)  
・地域の児童生徒との交流(寄贈物として持参するプールやおもちゃで一緒に遊ぶ)  
・石巻赤十字病院・公立志津川病院・国土交通省関係者からの高話  
・公立志津川病院瓦礫撤去作業・寺院清掃



## TOPICS

特色ある取り組みや出来事を報告します。

### 開学11年目、新しい試みです!

4月14日・15日

### 1年生最初の看護の授業—新入生宿泊研修「人間関係論」

本年から、新入生の合宿が始まりました。4月14日(木)・15日(金)に、玄界灘に面する福岡県立少年自然の家「玄海の家」で新入生103名、ボランティア4年生13名、教員13名での宿泊研修を実施しました。初日、アイスブレイキング演習から自己開示のためのエクササイズ、真っ青な空と海の拡がりのなか、グループでの創作活動として取り組んだ砂の芸術。ちょっと豪華なバーベキューディナー時には、新入生のアトラクション、4年生ボランティアのエイサー舞踊披露には沖縄出身一年生が飛び入り、大いに盛り上がりました。2日目、グループでの課題解決に取り組み、集団の中で役割や活動に気づけるようなエクササイズもありました。新たな企画の宿泊研修、新入生たちは、どんなことに気づき、どんな思いを抱いたのでしょくか。数人の感想を紹介します。



「合宿研修を体験して、私は積極的に誰でもコミュニケーションをとることが出来るようになりました。新しい自分や、さまざまな考えをもった友だち、4年生の先輩、先生方との密な出会いができました。この研修で見出した新しい自分を大いに発展させ、将来看護師として、さまざまな患者さんと接する時に生かしたいと思います。」  
(1年 泉 祐樹)

「人間関係論の授業の一環として行われた宿泊研修を通じて、私は本学看護学生としての自覚を改めて持つことができました。これから4年間、今の看護に対する思いを絶やすことなく、また2日間で学んだコミュニケーションの重要性を意識し、よりたくさんの人と関わる機会を作っていきたいと思います。」(1年 眞角 帆南)

「私は、入学ホヤホヤの、この時期にこのような研修に参加したことで、多くの効果があったと実感しました。まず、積極性や協調性など、団体行動に必要なことについて学びました。また、入学してから、ずっと周囲との間に壁を作っていたようでしたが、この研修を通して、その壁をぶっこわすことができ、沢山の仲間と仲良くなれました。みんなとの距離も縮まり、とてもいい思い出になりました。」(1年 仲村渠 果帆)

「研修開始当初の新入生たちは、予測どおり、誰かが何かを率先するわけでもなくメンバーとの会話にもぎこちなさが感じられました。しかし、プログラムの進行とともにお互いの距離感が少しずつ縮まり、4年生の絶妙なサポートと自然溢れる豊かな環境も後押しし、行動に変化がみられるようになりました。今回の研修で学生は楽しさだけでなく、集団の中で周囲を見渡し自分の役割を自覚し行動することの必要性と難しさも体験したと思います。私は研修に参加する中で学生が主体的に学ぶ力、成長する力をもっていることを実感しました。そして教員に求められることは学生のもつ力を最大限活かせるよう、必要以上の手出しも口出しもせず、待つこと、必要最小限のお節介だと気づかされた、『私にも貴重な』研修となりました。」(クラス担任 井上 福江)

記：研修担当教員 石橋 通江

5月14日

### 宗像市委託事業「たまご学級沐浴教室」を開催



本年より、宗像市からたまご学級(出産準備教室)の沐浴教室の業務委託を受けています。委託事業としての沐浴教室は5月、8月、3月の年3回です。それ以外に6月と10月から12月にも、数回実施します。

5月14日(土)に行われた沐浴教室についてご報告いたします。沐浴教室の講師を担当するのは大学院もしくは学部の助産学生です。他に、実技助手、運営助手として参加し、総勢14名の実施体制になりました。参加者は、午前10名、午後5名の計15名でした。多くは、はじめて出産を迎えるご夫婦でした。

他に、姉妹の子どもの手伝いをしたいと参加された方もいらっしゃいました。お子様の名前ランキングや沐浴に関するクイズでリラックス後、赤ちゃんの抱き方、衣類の脱がせ方・着せ方、沐浴見学に引き続き、実際に沐浴を体験していただきました。今回のポイントは、自宅で行う沐浴の方法を参加者の皆様と担当学生が一緒に考えたことです。

- <参加いただいた方々の声>
- ・とてもわかりやすかったです。
  - ・沐浴するときにマンツーマンでついでくださったのが良かったです。
  - ・とても有意義な時間を過ごすことができました。
  - ・少し自信が持てました。
  - ・産後のライフスタイルに合わせて、好きなタイプ（沐浴槽）を選んで良かったです。

<今後の課題>

自宅で行うことを想定して沐浴の体験をしていただきましたが、お腹の大きな妊婦さんにより安楽に沐浴を体験してもらうためには、ベビーバスをテーブルに置くなどの工夫が必要だったかもしれません。また、うつぶせにするときの持ち替え方をもう少しわかりやすくとの要望が挙げられました。次回は、妊婦さんの安楽と赤ちゃんのうつぶせの仕方を課題にしたいと思います。

今回の参加は、院生と学部の3、4年生でしたが、1、2年生にも広がることを願っています。

記：成育看護領域担当教員 佐藤 珠美・濱田 維子

## 5月15日 JAグループ・福岡教育大学と合同で 「大学生アグリスクール」を開始

5月15日(日)、お天気にも恵まれ、福岡教育大学の学生さんと一緒に、本学から徒歩10分程の所にある体験畑で、サツマイモ・スイートコーン・しし唐・かぼちゃ・スイカなどの定植を行いました。宗像地区の青年農業者の方々から指導していただきながら無事に苗を植えることがで



きました。数日前までのまとまった雨のせいで足場が悪く、長靴が脱げたり転んだり泥まみれになりながらも、みんな楽しそうに苗を植えていました。その後は本学に戻り、青年農家の方々から就農のきっかけや、どのような作物を作っているか、家庭菜園でも使える豆知識などのお話をいただきました。

この大学生アグリスクールは、JA中央会とJAむなかた、そして本学と福岡教育大学の三者が連携して行う事業で、農業体験や加工体験を通して食・農業・JAについて理解を深め、将来、看護師や教師となる私たちが地産地消や食育の大切さについて、学生の視点から理解していこうという目的で開講されました。近年、大学生の間で『お弁当の日』という食育の場があるのをよく見聞します。本学でも『お弁当の日』の活動していましたが、そこからさらに一歩進んだ食育を、看護の視点から行っていければと思っています。

大きな命のサイクルの中に存在する私たち人間は、他の生命の命をいただいて生きています。看護と食、健康、農業。一見すると何ら関わりのない個別の存在のように思えます。しかし、それらはすべて大きな命のサイクルの中の1要素なのです。健康に生きるためには絶対に口にしなければならない食べ物、その食べ物の向こう側には必ず農業というものが存在しているのです。このことを少しと言わず大いに理解できるような体験ができれば良いかと、専業農家の娘として、看護学生として思います。

5月から12月までの約半年間、4回に亘って講座が開かれます。次回は7月ですが、今回植えた作物の収穫にはまだ少し時期が早いので、少人数グループに分かれて宗像の農家さんのお宅にお邪魔し、農業体験をさせていただきます。

記：3年 内田 安貴

## 6月11日 4年 前期科目「専門強化実習Ⅰ」を終えて



4年前期の科目である専門強化実習Ⅰのなかで、テーマを「出産準備教育」とし、沐浴教室の集団教育の企画・運営から評価までを行いました。

過去に実施された沐浴教室の参加者および学生のアンケートを分析し、また、本学で3月と5月に実施された沐浴教室の評価を踏まえて、いくつか新しい試みを取り入れました。これに、学部3、4年生、大学院生を含む総勢12名がボランティアで協力してくださいました。以下に6月11日（土）の沐浴教室の様子を紹介させていただきます。

教室の参加者は5組10名のご夫婦と母娘でした。皆さん、初めてお産を迎えるということで、沐浴のことを知りたい、上手になって育児と一緒にやりたい！という積極的な気持ちで参加していただきました。

沐浴クイズや赤ちゃんの抱き方練習などを参加者の皆さんと一緒に行ったあと、今回初めての試みとして、「もしも赤ちゃんをお風呂に落としてしまったら」と「もしも赤ちゃんがお風呂のなかでうんちやおしっこをしてしまったら」という、沐浴の際に起こりうるハプニングへの対処を実演しました。参加者からは「不安に思っていた点をあらかじめ知ることができて参考になった」という声を聞くことができました。

- <教室参加者の声>
- ・これから生まれてくる赤ちゃんと一緒に楽しんで沐浴を行えたらと思う！
  - ・抱き方など何通りも教えてもらったのがよかった。
  - ・「もしも」の部分など楽しかったです。
  - ・赤ちゃんの大きさも、重さも何もわからなかったのが、来てよかったです。
  - ・もう少し沐浴実施の時間があるといいなと思いました。
  - ・ベビーバスやたらいなど、いろいろ試したかった。
  - ・他のご家族との交流の時間があればよかった。

### <今回の反省点・課題>

反省点としては、開始時間の15分の遅れ（会場がわかりにくい）もあり沐浴の実施時間を長くとれず、ご家族同士の交流を促すまでの余裕が無かった点があげられます。今後、プログラム内容や時間の配分の見直しを行い、教室にゆとりができればと思います。また、赤ちゃんをうつぶせにする動作（これまでよりも、皆さん上手でしたが）は、前回同様むずかしいという声がかかれ、継続課題になりそうです。

最後に、今回の沐浴教室を成功（準備、打合せ、練習、片付けなど）させるためにご協力いただいた学部生、大学院生の皆様、教室実施に至るまでアドバイスいただいた先生方にもお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

記：4年 大西 英里

6月15日・7月6日

## 「本を読んで話す会」(第9回目・第10回目)を開催



### ●6月15日 第9回 「本を読んで話す会」

6月15日(水)に、今年度最初の「本を読んで話す会」を開催しました。

今回はいつもと趣向を変えて、参加者それぞれがお薦めする書籍を紹介しあう会としました。「みんな来てくれるだろうか?」、「本の紹介をしてくれるかな?」と心配していた担当者でしたが、そんな不安は杞憂に終わり、参加した15名それぞれが多様なジャンルの書籍を紹介しあう和やかな時間となりました。会の最後に、今回紹介された書籍の中から参加者による挙手制で、次回「本を読んで話す会」の対象書籍を決めました。

圧倒的多数で選ばれたのは、この春に映画化もされた、カズオ・イシグロ著『わたしを離さないで』です。紹介された内容に、参加者のみなさんも興味津々の様子だったこの本、次回の「本を読んで話す会」でぜひ一緒に感想を語りましょう!

#### ★今回紹介された書籍★

- ・河田恵昭 『津波災害：減災社会を築く』 岩波書店，2010.
- ・広瀬弘忠 『人はなぜ逃げおくれるのか：災害の心理学』 集英社，2004.
- ・広瀬弘忠 『災害防衛論』 集英社，2007.
- ・高田 純 『核爆発災害：そのとき何が起ころのか』 中央公論新社，2007.
- ・小川洋子 『博士の愛した数式』 新潮社，2003.
- ・細川佳代子 『花も花なれ、人も人なれ：ボランティアの私』 角川書店，2009.
- ・夏川草介 『神様のカルテ』 小学館，2009.
- ・リンダブックス編集部 『99のなみだ：涙がこころを癒す短篇小説集』 泰文堂，2008.
- ・星野道夫 『旅をする木』 文藝春秋，1995.
- ・高橋克彦 『火城：幕末廻天の鬼才・佐野常民』 PHP研究所，1995.
- ・有川 浩 『阪急電車』 幻冬舎，2008.
- ・カズオ・イシグロ 『わたしを離さないで』 早川書房，2006.
- ・有川 浩 『レインツリーの国』 新潮社，2006.
- ・東野圭吾 『手紙』 毎日新聞社，2003.
- ・吉村 昭 『三陸海岸大津波』 文藝春秋，2004.
- ・ローズ・ジョージ 『トイレの話をしよう：世界65億人が抱える大問題』 日本放送出版協会，2009.

### ●7月6日 第10回 「本を読んで話す会」

7月6日(水)に「本を読んで話す会」を開催しました。

対象書籍は、先月開催されたこの会で「次回、ぜひ読んでみたい」という声が多かった、カズオ・イシグロ著『わたしを離さないで』です。読者の多様な感性を刺激するこの作品、「記憶」や「臓器移植」など、どこに視点を置くかによって感じ方もさまざまだったようです。

映画化もされており、参加者からは「映像で観てみたい」との声もありました。吉永図書館長からは、「臓器移植」に関連して、柳田邦男の『犠牲：サクリフェイス』（当館に所蔵しています）の紹介もありました。

今回は「本を読んでいないけれど話を聞きたい」と参加した人も多く、会の後半は、各人の好きな作家や小説の話題で盛り上がりました。

次回は夏休み明けを予定しています。対象書籍は、吉永館長もおすすめの『トイレの話をしよう：世界65億人が抱える大問題』（ローズ・ジョージ著、日本放送出版協会、2009.）です。

「この香り、水路の5番だぜー下水道ツアー」「トイレを見れば、あなたがどんな人間かわかりますー26億人と「トイレ大臣」」など、目次を見ても面白そうな内容です。読んだら誰かに話したくなるトイレネタがあるかも!?みなさんのご参加をお待ちしています。

記：図書館運営委員会

6月22日

## エイサーサークル「ゆいまーるのわ」 国際ソロプチミスト福岡ボランティアクラブ賞受賞



私達、エイサーサークル「ゆいまーるのわ」は、6月22日(水)に国際ソロプチミスト福岡のボランティアクラブ賞を受賞しました。

「ゆいまーるのわ」は今年で創部10年になります。大学2期生の先輩方から始まった「ゆいまーるのわ」は、病院や老人ホーム、小学校や地域のお祭りなどでエイサーを笑顔で踊ることによってボランティア活動をしています。この活動をソロプチミスト福岡の皆様にご覧いただき、この度、全国財団法人ソロプチミスト青少年ボランティア賞に推薦していただくと同時に、クラブ賞を受賞させていただきました。

エイサーは見た目以上にハードな動きが多く、体力的に厳しい場面も多いですが、部員一同が笑顔で踊ることをモットーに、地域の人々や病院、老人ホームの患者さんや働かされているスタッフの方々と交流をしています。

私達が、笑顔でエイサーを踊ることで、エイサーを見てくれる人が笑顔になり、エイサーを踊っている私達もより笑顔になるという笑顔の連鎖が「ゆいまーるのわ」にはあります。私達がモットーにしている「笑顔」は大学を卒業し、看護師や保健師として働いていく上で、患者さんやそのご家族に対して最初にできる看護だと思います。私達は「ゆいまーるのわ」を通して、笑顔が人と人とを繋げるものであり、人を癒す力があるということを学びました。

今回の国際ソロプチミスト福岡のクラブ賞を受賞させていただくことで、何のためにエイサーを踊っているのか、そして自分達が今活動できているのは10年間におよぶ先輩方の活動や地域の方々、先生方の支えがあったからだという事について、見つめ直すことができました。この賞を糧に、今後も見ている多くの方々笑顔になるようなボランティア活動をしていきたいと思ひます。

ぜひ、「ゆいまーるのわ」のエイサーと笑顔が見たいという方は大学学務課までご連絡下さい！！

記：4年 榎木野 聖美・下地 絵里菜

6月23日

## 第11回国際シンポジウム開催



本年度のテーマは「被災者のニーズにこたえる看護とは～東日本大震災の実例を通して～」でした。学生と教員をあわせ396名の参加がありました。

学生による基調報告、被災者へのインタビュー報告、今回の災害に於いて現場で活躍された看護職者による基調講演、そしてパネルディスカッションと充実した内容でした。6月23日(木)に開催した今年のシンポジウムの詳細を紹介します。

まず実行委員が作成した動画の鑑賞から今回のシンポジウムは始まりました。動画は震災前の被災地の穏やかな風景から始まり、すべてを飲み込んでゆく津波、破壊された町、変わり果てた自分の町を見つめる被災者の後姿へと変わっていきました。今回の大震災の影響を再確認しシンポジウムに臨みました。

第一部は被災者の声を知ることを目的に、学生による2つの報告を行いました。

最初は、岩手県で被災され福岡県に避難されたご家族へ行ったインタビューの結果についての報告でした。これは、被災者家族の皆さんの本シンポジウムへのご理解・ご協力を得られて実現したものです。ここでは、震災発生から3ヶ月以上が経過した時期に、震災当時を振り返りながら語っていただいた内容を報告しました。次に、震災発生後2週間の新聞記事から被災者の言葉を集めた結果が報告されました。被災者の「生の声」に参加者が真剣に耳を傾けていた姿がとても印象的でした。

第2部は、長崎DMAT隊として震災直後から活動された本学の増山純二助教と、日赤福岡県支部第32次救護班として活動された福岡赤十字病院の金尾由紀看護師長のおふたりによる基調講演が行われました。それぞれの先生方は、活動時の様子を写真をおりまぜながら講演してくださいました。将来、災害看護に携わろうと思っている学生はもろんのこと、すべての学生が「災害看護」について考えるきっかけになったと思います。

第3部では、第2部の講演者と、本学助教で、ご自身も仙台市で被災された伊藤てる子先生、災害医療の専門家である喜多学長のおふたりを加え計4名のパネリストで「被災者のニーズにこたえる看護とは」をテーマにディスカッションを行いました。パネリストの皆さんからは被災したときに役立ったもの、要支援者への看護、家族との連絡の取り方など私達が疑問に思っていたことを回答していただきました。限られた時間ではありましたが、私たち看護学生にとって、とても有意義な時間を過ごすことができました。

今回の震災は、日本がいままで経験したことのないものでした。災害はいつ起きるか誰にもわかりません。

今、私達に何ができるでしょうか。

この「大震災」を過去の出来事にしてもよいのでしょうか。

私達は「学ぶ」ことができ、「考える」ことができ、「共有する」ことができ、そして「次につなぐ」ことができる存在だと思います。いつおきるかわからない震災に対して私達にできることは、普段から備えることだと思います。私たちはこれからも学び、考え、仲間と共有し、次につないでいけるように過ごしていくことが大切だと思います。

最後になりますが、今回のシンポジウムのためにご協力してくださった先生方、事務の方、そして実行委員を支えてくれた学生の皆さん、本当にありがとうございました。

記：国際シンポジウム実行委員 3年 小牧 美幸

7月28日

## 2011年前期総合英語コース修了証授与式を開催



7月28日(木) 昼休み、4月から実施されてきた総合英語コース(課外コースで履修は任意)の修了証授与式が行われました。総合コースのどれかに定期的に出席し一定の成果をあげた学生に対し、その努力を労い次のステップに向けてさらに精進するよう励ますべく行われたもので、仲間や英語コースの先生方が見守る中、学長から学生の一人一人に修了証が手渡されました。さらに学長から一人一人にプレゼントも手渡され、学生たちは思いがけないプレゼントに大喜びでした。この課外英語コースは、英語担当の因教授、力武特任准教授、徳永特任講師、村上非常勤講師のご尽力により実施されているものです。易しい記事の読解レベル(基礎コース)から今日的課題について意見交換や議論(上級コース)まで、様々な段階があります。今回表彰された学生の中には、二つ、あるいは、三つのコースを修了した学生もいます。

本学では、既にTOEIC770点を取った学生も出ていますが、夏季休暇を前に、心機一転、さらに本格的な外国語学習を始める仲間が増えて欲しいものです。

写真は、表彰された学生とコースを続けて下さった先生方そして学長との全員笑顔の記念撮影です。

記：学務課 迫田 明美



## ■ランチオン・ミーティング

お昼のひととき、授業では聞けない話を聞いて視野を広げています。

第1回 5月13日

### 鈴木 清史 教授 「創られる文化」



文化人類学を専門とする鈴木教授が、オーストラリアでの現地調査に基づいて都市の先住民文化について紹介しました。以下は、鈴木教授の講演の要旨です。「オーストラリア国民の全人口の4分の1は外国生まれで、本人もしくは親が外国生まれの国民は、全体の半数にあたる。一方、オーストラリア先住民の人口は、全体の2%にすぎない。先住民は、4～5万年前からオーストラリアに住んでいるが、ヨーロッパ人による植民地開発により土地や文化が破壊され、社会のマイノリティとなった。歴史的には、後の移住者から差別を受けたり、独自の文化を否定されたりした時代もある。このような背景がある中、2000年のシドニーオリンピックでは、先住民文化がオーストラリアの象徴のように扱われ世界中に伝えられた。こうした扱いは、先住系の人々が自分たちの祖先の文化を改めて見つめなおす機会となっただけでなく、現代の多くのオーストラリア国民が持つ『相互尊重』の意識をさらに醸成することに繋がった。」

多文化社会がもつ「文化」の意義について考えさせる講演であり、看護学生や教職員は異文化看護について考える貴重な機会でした。

第2回 6月11日

### 喜多 悦子 学長 「被災地訪問報告—50日目の東日本大震災」

5月初旬に喜多学長が単独訪問した東日本大震災の被災地—宮城県南三陸町、石巻市、東松島市、名取町、仙台市、山元町、亶理町および栗原市—の現状と、被災者のニーズを解説しました。

宮城県の南部に位置する亶理町や山元町では、津波までの時間があったため、一旦、避難したものの何かを取りに戻り被災した人も多く、広大な農地は、見渡す限り泥に埋まり、未だ遺体が埋まっている可能性があることなど、写真を交えて報告され、このような被災状況の無残さや痛ましさは、学生・教職員に衝撃を与えました。

また被災地では、道路、食料、通信・電気、衣類、飲み水はほぼ充足している一方、食料の種類には過不足があり、生活用水は不足している。保健医療に関しては基本的には充足しているが、外部応援者に委ねられていることも多く、緊急事態への対応に不備があり、継続性にも問題があり、加えて、復興への最大の問題は被災者の職場復帰と指摘しました。

喜多学長は、将来、保健専門家になる看護学生は、防災に関する知識を持ち、それを実践に生かすことが重要であり、防災教育と準備の必要性を強く訴えました。



第3回 7月7日

### 堀井 聡子 助手 「国際協力のひとつのかたち—JICA専門家という選択」



ブルキナファソでJICAの看護専門家として活動した経歴を持つ堀井助手が、JICA専門家となるきっかけとなったニジェール共和国（以下、ニジェール）での海外青年協力隊時代の生活を振り返りながら、活動概要について写真を交えて語りました。

堀井助手は、学生時代に実践してほしいこととして「専門性を身につけること」、「コミュニケーション能力（人間力）を培うこと」、「ネットワークを構築すること」の3つをあげました。国際協力を行うために語学力を養うことも重要ではありますが、看護師だけでなく保健師としての専門性を講義、演習、実習で身につけること、

大学内でも同級生だけでなく多くの人とコミュニケーションをとること、そして人と人のつながりを大事にすることで魅力的な人間になることがとても重要だと学生に訴えました。

## みんなの広場

素敵なキャンパスライフを送っている在學生に、本学の魅力、看護の魅力を探りました。



**内村 亜里紗さん** 2011年入学 熊本県・済々黌高校出身

私は今、授業で看護とは何かということや、人体の構造と機能など様々なことを学んでいます。人体の構造と機能の授業では、「なぜ涙が出ると鼻水も出るのか」や「どのようにしてしゃっくりが出るのか」など自然に起きていることのメカニズムも学んでいく中で分かっていき、面白いです。ナース服を着ての実習では、自分たちが患者役にもなります。そこでは、体験して初めてわかることばかりで、本当に発見と驚きの多い毎日です。大学の周りは、自然豊かで癒され、そのような場所でサークルの友達や先輩方とスポーツをするのは、とても楽しく、気持ちが良いです。留学を支援してもらえらる制度などもあり、自分の目標も入学前より高くなり、それを実現させるためにとても良い環境に私はいると思います。

**今岡 建人さん** 2010年入学 福岡県・三池高校出身

私は、将来人の役に立つ仕事に就きたいという思いから、この大学に入学しました。この大学で得たことは、きちんと計画を立て要領よく何事もこなしていく力です。専門科目ということでやらなければいけないことが多いため、何事も要領よくこなしていけないと、アップアップになってしまいます。今は、何ごとにも計画的に進めるように心がけ、高校生の頃よりも計画性のある人間になれたと思います。また、私は自治会長をしているため、数ある看護大学の中でも、この大学が最も良い大学となるように、一学生として日々努力しています。先生方とお話をする機会も増え、授業では学べないことを教えて頂けたりして、その度に自分が成長していると実感しています。自治会長は全学生の代表でもあるため、責任感をしっかり持ちこれからも精進していきたいです。多くのことに興味を持ち、自分の可能性と視野を広げていきたいです。



## 研究室訪問

楽しい授業を展開してくださる先生方の素顔を紹介します。



学部長／岡村 純 教授

**Q:先生は普段どのような研究をされているのですか？**

A:もともとは、農業従事者の健康問題が専門でしたが、健康の基盤となる生活問題までテーマを広げて全国の農村(46都道府県)でフィールドワークをしてきました。看護大学に移ってからは、離島や農村の高齢者のライフストーリーと健康との関連について学生・院生と一緒に取り組んでいます。

**Q:趣味は昆虫採集だそうですか・・・？**

A:小学校3年から続けていますので、趣味というよりはライフワークです。47都道府県の山や里でネットを振っています。老後は私設の「蝶の自然史博物館」を開いて子ども達に生きものの豊かさと生命の大事さを伝えられたら良いと夢見ています。

**Q:どんな大学生でしたか？**

A:学部時代は「勉強」にまじめに取り組んでいましたが、もっと自分の好きな分野、おかしな、面白いなと感じた事象にのめり込んだ方がよかったな、と今は振り返っています。

**Q:在學生、そして受験生へのメッセージをお願いします。**

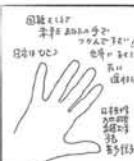
A:大学は学問するところです。自ら問いを発し、学び続けることを忘れないでください。

# We're in Media

新聞紙面に掲載された記事を集めました。

## 学長548人 被災地にエール

### 「未来つかんで」君達の力必要



東日本大震災発生後、被災地を支援する学長548人が、被災地にエールを送る。喜多学長は「未来つかんで」をテーマに、被災地の復興に必要なのは、君達の力だ、とメッセージを送った。

訂正 6月30日付「学長548人 被災地にエール」の記事で、日本赤十字九州看護看護大学の喜多学長のメッセージに「困難をいえ」とあるのは「困難をいえず」との誤りでした。訂正します。

7月2日(土) 朝日新聞掲載  
6月30日 掲載学長コメント訂正  
「国難」→「困難」

7月28日(木) 西日本新聞掲載  
日赤九州看護大 学生80人宮城へ  
3年生授業の一環

日赤九州看護大 学生80人宮城へ  
3年生授業の一環  
被災地を訪問し、被災者の現状を見て、被災者のためにできることを考える。授業の一環として、宮城県へ派遣された。

5月13日(金) 西日本新聞掲載  
学生向け農作業講座 15日スタート  
JAなど主催

### 看顧大生被災地へ

海外研修を変更  
大震災  
日本赤十字看護大学は、被災地を支援するために、海外研修を変更し、被災地へ派遣する。

7月31日(日) 朝日新聞掲載  
看顧大生被災地へ  
日赤九州看護大 海外研修を変更

### 直売所の新グルメ開発

県内6大学の学生競う  
農林水産まつりで審査へ  
JA福岡中央会

9月8日(木) 西日本新聞掲載  
直売所の新グルメ開発  
県内6大学の学生競う

### 「被災地に来て現状見て」

合同学祭イベント 陸前高田市長訴え  
合同学祭イベント「好いとうよFUKUOKA」被災地語る

9月11日(日) 西日本新聞掲載  
合同学祭イベント「好いとうよFUKUOKA」被災地語る

### 日本支店長

西日本支店長会で開いた  
喜多学長講演  
「失敗国家」喜多さん語る  
「脱却のヒントは教育」  
喜多学長講演「失敗国家」語る

8月24日(水) 西日本新聞掲載  
西日本支店長会 喜多学長講演「失敗国家」語る

### 学生ら80人派遣

九州ボランティア活動へ  
九州ボランティア活動へ  
学生ら80人派遣

### 東日本大震災

被災地を支援  
東日本大震災  
被災地を支援

8月4日(木) 毎日新聞掲載  
学生ら80人派遣  
日赤九州看護大  
ボランティア活動へ

### 被災地の現状を見て

陸前高田市長と学生が対談  
被災地の現状を見て  
陸前高田市長と学生が対談

9月11日(日) 読売新聞掲載  
「好いとうよFUKUOKA」  
陸前高田市長と学生が対談

9月11日(日) 朝日新聞掲載  
「好いとうよFUKUOKA」に学生参加  
「まずは被災地を見て」

### 「まずは現状を見て」

陸前高田市長 学生らと討論  
「まずは現状を見て」  
陸前高田市長 学生らと討論



日本赤十字九州国際看護大学

[www.jrckicn.ac.jp](http://www.jrckicn.ac.jp)

発行 日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会  
〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地